1 題材名

附小発 音楽の世界旅行へ出かけよう

2 授業構成**(1) 教材に対する反省と新しい提案**

本題材は、小学校学習指導要領解説音楽科編第5学年及び第6学年の目標において以下のように位置づけられている。

(3) 様々な音楽に親しむようにし、基礎的な鑑賞の能力を高め、音楽を味わって聴くようにする。

子どもたちは、小学校の6年間で様々な音楽に出会う。それは国内外問わず国外で作詞作曲されたわらべ歌や合唱曲、鑑賞曲など多岐にわたり、鑑賞曲の中にも弦楽器や木管楽器、金管楽器などの楽器の重なりを感じ取る楽曲からオーケストラで編成される楽曲、拍の違いを感じ取ることができる楽曲や曲の構成を感じ取りやすいものなど、さまざまである。5年生のこの時期に出会う様々な音楽とは、和楽器の音楽を含めた我が国や諸外国の音楽など、くらしの中から生まれ、自然と調和しながら人々に長く親しまれている音楽のことを言う。この時期の子どもたちは自己の確立ができつつあり自己を客観視することができるようになってくるので、音楽を聴いて感じたことを音楽的な要素だけでなくこれまでの学びで得てきたさまざまな知識、歴史や文化と結び付けて味わい深く鑑賞することもできるようになってくる。また、我が国や郷土の音楽は日本的な感性や音楽性つまり、くらしや美意識に根ざしているため、日本的な感性を働かせながら、日本の音楽を味わうことができるようになる。そして、世界の音楽についても生まれた背景、受け継いできた人々の思いや願いを知ることで理解を深めることができる題材であると考え。一方で「日本と世界の音楽に親しもう」を教科書の題材構成のまま実践すると、時間数が少ないのでねらいを達成できなかつたり、思考の流れが途切れてしまつたりしたことが反省点としてあげられる。そこで、児童の実態をもとにしながら思考の深まりと広がり期待できる独自の題材を設定することで、ねらいにせまることができる考えた。

(2) 子どもの学びの実態と期待する学び方

本学級の児童は、1年生のころから音楽の時間において日本と世界の音楽に触れてきている。その中で子どもたちは「聴いてまねをする」活動を多く経験してきた。たとえば、4年生のときには民謡歌手の歌唱を聴いて、声の出し方やこぶしのつけ方などに気づき、名人の歌唱に近づけようと自分たちで試行錯誤しながら「貝殻節」を歌った。また、サンバの学習では日本の音楽文化とは異なる外国のリズムを会得するとともに「コール」&「レスポンス」に代表されるような簡単なセッションを友達同士で楽しみながら学んできた。いずれの学習においても、諸外国の音楽に対してその全体像を大まかに捉えようとするだけでなく、音楽の細部に見られる演奏の工夫や楽器の違いによる音色の特徴、さらには音楽そのものと文化や風土との関わりについて意欲的に探ったり、考えたりすることのできる児童が多い。また、1年生から親しんできた和太鼓の学習により、日本の基本的なリズムともいえる2拍や4拍を身体全体で感じ取ったり、正確な拍にのって演奏したりすることができる児童も多い。そこで、日本に最も近い国でありながら日本の拍とは違う長短(チャンダン)という独特のリズムをもつ韓国の音楽に出合わせることで、これまで触れてきた音楽との違いを感じ、それぞれの国のリズ

ムの特徴を捉えることができるようにしたい。子どもたちは身体と頭に染みついている日本や西洋の拍感との違和感を抱くと思われる。その違和感のもとは何なのかを常に意識できるような活動を取り入れたい。口音（クーム）（＝日本で言う口頭伝承）にこだわってくり返し長短を唱えながら聴いたり、聴いた長短を口音しながら演奏したりするという活動の中で、耳と口と手と全身が鼓動と一体になって初めて演奏が可能になることに次第に気づいていく子どもたちの姿を期待したい。そして、「サムルノリ アンサンブル」を通して友だちと心と息を合わせる大切さはどの国にも共通であることに気づき、より韓国の音楽を身近に感じることができるようになることを期待したい。

（３）本時に向けての教材研究

はじめに「親しむ」をどう捉えるのか、具体的な児童のどのような姿を「親しむことができた」とするのかを明確にもつことが大切になってくる。なぜなら、「親しむ」＝経験すること、触れることだけのものになってしまうがちなからである。そこで、ここでは次の２点を「音楽に親しむ」姿として捉えるようにしたい。①音楽を目と耳だけでなく全身で感じ取りながら、音楽を聴いたり表現したりする姿、②音楽を聴いて感じ取ったことを、自分の言葉で表現したり、なぜそう感じたのか考えたりしようとする姿、である。こうした姿をめざし、目や耳だけでは感じ取ることができない雰囲気をもつ教材を追究することや感じ取らせる活動を取り入れることが重要になると考える。また、言語活動を通して自分が聴き取ったことや感じ取ったことを友だちと交流することで、新たな発見や充実感・満足感を得ることができると考える。

さらに、日本や生まれ育った郷土の音楽に親しむためには文化や歴史・伝統などの音楽の背景から自国の音楽文化に関する理解を深める必要がある。我が国の音楽的な特徴として、①５音音階の旋律②自然素材を活用した和楽器の音色③曲種に応じた発声④歌詞が醸し出す情景描写の４点が挙げられるが、本題材では①と②の特徴を感じ取らせたり、音楽と文化・生活との関わりから理解させたりすることで親しむことができるようにしたい。③と④の点については６年生の題材で深めていきたいと考えている。それに対して韓国の音楽的な特徴として、①中心音が真ん中に位置している音階②長短とよばれる独特のリズム③伝統的な信仰と深い関わりをもつ金属的な楽器が生み出す迫力ある音の３点が挙げられる。本題材では、②と③の特徴を音楽と自然や生活との関わりから感じ取らせたい。

次に、教材についてである。「さくらさくら」は箏の楽曲である。５音音階の旋律が美しく箏の音色が余韻を残しながら響く美しさが特徴的で、日本のくらしや美意識と音楽とのつながりを子どもたちにも感じ取らせやすい。「龍神太鼓」は１年生から親しんできている和太鼓教材の１つで、終盤まで基本である４分の４拍子を身体で体感したり、速度を感じたりしながら和楽器の響きを味わい、演奏の終わりの部分では、友だちと息を合わせるための工夫に気づかせることができる構成になっている。韓国の教材については、教科書では韓国の民謡「アリラン」が使用されているが４種の伝統打楽器による合奏「サムルノリ」を教材化することにした。その理由は次の点である。①旋律をもたないリズムアンサンブルなのでリズム的側面だけに集中することができる②打つという手の動作にとどまらない大きな身体運動や呼吸法に直結したいくつかの長短を実体験することができる③西洋音楽とも日本音楽とも異質な長短という独特の拍子感が体験できることが挙げられるからであるが、その中の独特の拍子感長短にこだわることで、教材価値にも深くせまることができると考える。

最後に、こうした教材の価値を最大限発揮することができるような工夫が必要となる。上記の②と③を子どもたちの目や心にしっかりと残せるような教材開発と授業構成をしていきたい。「サムルノリ」に使用される長短のリズムパターンは２０種類を超える。一般的に演奏されている「サムルノリ」は１曲１５分～２０分のもものが多く、即興部分も含まれるのでそのまま扱うことは難しい。そこで、

「サムルノリ」の特徴が損なわれないようなリズムパターンを厳選し、子どもたちが口音可能な長さに構成することにした。具体的には、基本の長短23種類の中から多くの地方で共通して使用されている長短リズムの中から「サムルノリ」の演奏でよく知られる「ウッタリプンムル」の楽曲の中で使用されている共通長短を取り出し「サムルノリ」の特徴を捉えられるようにした。3拍子を4回くり返し、12拍を1フレーズと考える「クッコリ」の長短と2拍子が2回くり返される「フィモリ」の長短である。そこに、ケンガリのリードで、「はじまるリズム」と「終わりのリズム」を加え、構成した。それぞれの楽器の特徴や演奏方法を学習し、「チャンゴ」の長短から演奏するようにすることでより韓国独特の長短を身体全体で感受できるようにしたい。その後「サムルノリ」のアンサンブルにつなげ、長短のリズムを身体全体で表現することを楽しみながらも「サムル=4物」のアンサンブルを完成させるための条件に気づき、実現に向けた練習をくり返し行う。同じ楽器同士の息づかいを合わせるように、異なる楽器がそれぞれ何をしたらよいかを演奏活動を通して考えさせたい。リード楽器のケンガリを中心に視線や息づかいを合わせることやかけ声の大切さに気づかせたり、それに気づきながらもなかなかサムルが合わないのはなぜかを問うたりする中で、そこでもその理由が「サムルノリ」の長短にあることに気づき日本と韓国のリズムの特徴の違いを自分の言葉で表現できるところまで高めることにより本題材でねらう「親しむ」姿にせまることができるものとする。

本時の学習は、「チャンゴの長短」の演奏に挑戦する。前時の日本の龍神太鼓のリズムを口唄歌したり、身体表現したりして本時の長短とのギャップを感じられるようにしたい。口音をくり返し行いながら、身体表現をしたり代用楽器を演奏したりする活動にすることで、楽器の技法や演奏技術ではなく長短の特徴に焦点化できるようにする。児童の中にはリズムを身体の揺れやばちの動き、息づかいで表現できている子どももいると予想されるので、周囲の子どものヒントとなるように、活動を見合う時間を設定し、独特の長短リズムを口と耳そして目と身体全体で感じ取ることができるようにしたい。

3 題材の目標

- 日本と韓国の特徴を感じ取りながら、我が国や諸外国の音楽に親しむようにする。
- 日本や韓国の音楽のよさや楽器の響きの美しさを味わいながら聴いたり、その雰囲気を生かして表現したりすることができるようにする。

4 学習計画（全8時間）

第1次	和楽器のひびきを味わいながら聴き、日本の音楽の特徴を感じ取る。	1/8
第2次	韓国の音楽を聴き、特徴を感じ取ったり特徴を生かした演奏をしたりする。 (調べ学習を行い、歴史的・文化的な背景を知る)	
第1時	「サムルノリ」をCDで鑑賞し、音楽的な特徴を感じ取る。	2/8
第2時	「サムルノリ」に使用される伝統楽器について知り、2つの楽器の「長短」を表現する。	3/8
第3時	チャンゴの長短を身体で感じ、韓国の音楽の特徴を感じ取る。	(本時) 4/8
第4時	ケンガリの長短を身体で感じ、表現する。	5/8
第5・6時	サムルノリをアンサンブルで演奏し韓国の音楽の特徴を味わう。	6/8 , 7/8
第7時	日本と韓国の特徴について演奏を通して自分の言葉でまとめる	8/8

5. 本時について

(1) 本時目標

チャンゴの長短を演奏することを通して韓国の音楽の特徴を感じ取る。

(2) 準備 CD, DVD, チャンゴ(4), 各自の代用チャンゴ

(3) 本時の展開 (○教師の意図 ◇全体の支援 ◆個への支援)

学習活動	教師の意図・支援
1. 龍神太鼓のリズムを口唱歌と身体表現で演奏する。 2. 本時のめあてを知り, 口音と身体表現による長短の練習をする。	○日本や西洋の拍感をふり返らせることで本時の長短とのギャップを感じ取りやすくする。 ◇各楽器の特徴が長短に深く関係があることを意識し, その特徴をイメージしながら演奏させるようにする。 ○チャンゴの長短こそ韓国の独特のリズムを表現できるものであることを知らせ, 本時の活動に意欲をもたせる。
チャンゴの長短から 韓国の音楽の特徴 を 見つけよう	
・なんとなく今までにないずれがある感じがするなあ。 ・龍神太鼓には出てこないリズムだ。 ・リズムが長いんだ。 3. グループ活動で新たに出てきた特徴について話し合う。 ・チャンゴの長短には口と手に何かプラスされないと演奏できないんじゃないかな。 ・本当だ。複雑な長短には自然に全身がゆれ動くとしっくりくるな。 ・つなげると何か変な感じがする。 ・これが韓国の音楽の特徴なのかな。 4. これまでの長短にケンガリが加わった「サムルノリ」のアンサンブル演奏を視聴する。	○教師の口音を聞き(フィモリの長短 トン ドン クンタクン) 心の中で数回くり返し唱え, 教師の口音と合うようになった児童は一緒に声を出して唱えたり声を出しながら身体表現をしたりするようにし, 全体の把握ができるようにしたい。 ○チャンゴの長短の困難さは何かを発表し合い, どうしたらよいか解決のヒントを探るために活動することを意識させたい。 ◆チンとプクとの違いは何かを考えて発表するように助言する。 ○途中, グループ活動に変換し子どもたちの学び合いの時間を確保したい。 ◇クッコリの長短口音(トンキッタッ・トンタタタ・トンキッタ・クンタタタ・トンキッタ・トンタタタ・トンキッタ・クンタ)を同じようにくり返し行い, 10人程度の児童が口音や身体表現をできるようになったら, グループ活動に切りかえる。 ◆口音や身体表現がそろそろようになったグループにはフィモリとクッコリをつなげて演奏するようにする。 ○韓国の音楽の特徴である長短は目や耳, 口や手だけではない身体表現による躍動感や呼吸法によるリズム感とが一体化してこそ表現できることを確かめたい。